

葛紅兵『沙床』における「欲望」と「虚無」

——身體創作についての覺書——

高 屋 亞 希

1 はじめに

結婚に縛られない性的關係が、新しい生活スタイルとして中國で社會的に話題を呼んだ¹⁾のは、20世紀末から21世紀初にかけての世紀轉換期のことであった。こうした世相を背景に、作家自身の實體驗であることをセールスポイントに謳い、性的關係に新たな意味付けを試みる作品が數多く發表された。こうした創作スタイルが身體創作と呼ばれ、文壇の流行現象に數えられた²⁾ことは、すでに舊聞に屬すだろう。身體創作の多くは若手の女性作家によるものだが、2003年末に發表された『沙床』³⁾は、作者の葛紅兵⁴⁾が男性でかつ上海大學教授という肩書きを持つことから、スキャンダラスな事件として社會的に大きな話題を呼んだ⁵⁾。

『沙床』は葛紅兵自身の體驗であることを匂わせ⁶⁾つつ、その多くが虚構で組み立てられた⁷⁾もので、複数の女性との性的關係や戀愛を描いた身體創作の典型例である。『沙床』の梗概については2章で紹介するが、死という結末を予感しながらも、最後まで相手への犠牲的愛情を全うするというラブストーリーで、「虚無」的な運命論を背景に性的關係が描かれている點が特徴となっている。興味深いのは、こうした特徴が2001年に發表された李修文の『滴泪痣』⁸⁾ともきわめて似ているという點だ。『沙床』は身體創作の男性版として、一方の『滴泪痣』は村上春樹の中國版としてそれぞれ話題を呼んだが、その共通性が取り沙汰されたわけではない⁹⁾。

しかし話題を呼んだ點が異なるにも関わらず、両者がともに「虚無」的な運命論を背景にした性的關係を描いていることは、結婚に縛られない性的關係や「欲望」といった世紀轉換期の新たな世相を、男性作家がどのように表現したか、という問題の廣がりを考える恰好の題材になっていると言えるだろう。本

稿では、『沙床』において男性の性的「欲望」がどのように意味づけられ、その意味づけに「虚無」的運命論がどう利用され、犠牲的愛情を獻げるラブストーリーを創作する背景となっているか、という諸點を分析していく。紙幅の関係上、李修文や村上春樹受容の問題との関係については論じられないが、性的「欲望」をどう表現するかという世紀轉換期の課題¹⁰⁾をめぐって、村上春樹が参照例の一つであった可能性を視野に置いている、と理解いただきたい。

2 性的「欲望」の意味付け

『沙床』の主人公である諸葛は、上海の大學で教鞭をとっている。肝線維症の家系に生まれ、數年前に結婚を目前にした長兄も26歳で亡くなっており、諸葛自身も結婚など將來に對して展望を持たず、複數の女性と性的關係だけの交際を繰り返している。しかし偶然に一夜の關係を持った裴紫が、夫に死なれた精神的な支えを強く求めていたことから、諸葛は一夜限りの關係と割り切ることに躊躇する。一度は裴紫を自宅に受け入れるものの、諸葛は二人の關係をどう進めていくかで悩み、そうした諸葛の煮え切らない態度に失望した裴紫は家を出ていく。互いに相手を思いながらも前に進めない二人を、同じく諸葛に愛情を抱く張曉閏はじれったく思い、仲を取りもとうとさまざまに心を砕く。張曉閏の提案で、將來的な保證や見返りを相手に期待せず、現時點の互いの愛情だけで結ばれるという事實婚を受け入れた二人は、ようやく穏やかな生活を営みはじめる。しかしその直後、諸葛の病狀は急速に進行し、出會いから一年あまりで死という結末を迎える。諸葛の死の直前、裴紫は彼と運命を共にすると決意し、自らの胸にナイフを突き立て、二人は固く抱き合いながら息途絶える。

以上が『沙床』の梗概である。“激情はあってもすぐに消えてしまうような激情”(p67)で、かつ“愛なき激情”(p67)しかないと評される諸葛は、異性である相手の全てを理解し、將來もずっと共にありたいと願うような愛情には、全く關心を示さない。その一方で性行為を通じた、女性の身體を舞臺に“兩者のパワーが織りなす永遠の魅力”(p51)には、全面的な贊美を寄せている。

おまえは異性の身体にかくも夢中で、ほとんど變態と言ってよいだろう。だがおまえは自分が高尚だと知っており、おまえにとって身体とは藝術への媒介である。(中略) 身体は偉大にして活力に満ちた美であり、突起した部分が綻び、くぼんだ部分が満ち溢れ、體液がおまえに導かれることで體內をめぐる。身体とはなんと豊かにして、表現力に富んだ藝術の逸品であることか！(中略) 身体の内部に深く分け入り、身体の秘密や曲折を味わう。内在的な腫に導かれ、おまえは身体のほの暗い要路を通り抜け、あの秘められた場所へと進入する。そして濕り氣をおびて收縮し、かつ目眩く、ドキドキする内側からの體驗を通じて、身体の芳香を感じとるのだ。(p51)

諸葛が性行為を單なる性的「欲望」の發露と考えていないのが分かる。諸葛は自身のテクニックを驅使することで女性の身体から反應を引きだし、それを“藝術”と稱している。つまり諸葛にとって性行為とは、“藝術”を創造する“高尚”な行為と位置づけられていることになるだろう。この時、諸葛と相手の女性の關係は、藝術家と藝術品のそれに擬えられ、生身の女性は藝術家の“内在的な腫”で見いだされるモノと化す。更にこの引用で興味深いのは、“自分が高尚だと知っている”という表現である。一般には性への惑溺が“變態”と思われることを前提にした上で、“高尚”な創造的行為であることは自分しか知らないかもしれない、と言い譯めいた意識を言外に伺わせている。

実際に、諸葛の派手な女性關係は大學でも噂になっており、自身が語るところによれば、過去にも性的「欲望」が原因で手痛い目にあっている¹¹⁾ ようだ。そのため、諸葛は世間を意識して自分の性的「欲望」を抑制するようになり、“久しく欲望を抱いたことがない”(p121)とも語っている。しかし、諸葛が性的「欲望」を“造物主から賜りし贈り物”(p121)として基本的に肯定していること、かつ複数の女性と性的關係のみの交際を重ねていること、といった事實を勘案すれば、諸葛の性的「欲望」が失われたという言葉を文字通りに考える必要はないだろう。とは言え、性行為を單なる性的「欲望」によるものではなく、“高尚”な“藝術”だと主張するために、諸葛は性行為に至るまでの過程でどのような配慮を行っているのだろうか。また諸葛が主張するような、「欲

望」を伴わない性行為はいかにして可能になっているのだろうか。裴紫と出會って性的關係を結ぶまでの過程を確認していく。

諸葛はインターネットを介して裴紫と知り合い¹²⁾、通信のやり取りが斷續的に續いていたと語るが、同時に彼自らはメールを書くということがなかったとしている。こうしたネット上の關係から現實へ向けて一步を踏み出したのは、裴紫が最近“悲しみでやりきれない”(p16)ので、來週月曜に南京の金陵ホテルまで來てほしい、とメールを寄こしたことが契機となっている。悲しみを紛らわす話し相手が必要ならば行かざるをえない、と諸葛は指定の日に南京へ向かう。ここで注意すべきは、メールでのやり取りと南京行き of いずれもが、裴紫からのアプローチによって實現したもので、諸葛は二人の關係を進めていくという積極性が全くなく、一貫して受け身であったという設定になっている點だ。

こうした諸葛の受動性は繰り返し強調されている。金陵ホテルのロビーで待っていた諸葛は、ヒルトンホテルの一室に來よう携帯電話で裴紫に呼び出されるが、有無を言わさない裴紫の態度に諸葛は“獨斷的”(p21)だと不快感を抱く。諸葛は裴紫に會わないまま上海へ戻ろうとするが、裴紫から携帯電話越しに懇願され、指定されたホテルの一室に向かう。男女がホテルの一室で會うという状況は、容易に性行為への展開を予想させるものだが、そうした展開に対する諸葛の期待は恬淡としたもので、裴紫に請われてやむを得ない選擇だったと言い譯できるような設定にしてあるのが見てとれる。

『沙床』では裴紫との關係に限らず、小説中に描かれる女性との性行為の全てについて、女性から誘ったという設定になっている。常に女の方から進んで身體を開くという小説の設定はご都合主義的¹³⁾であり、男性が思い描くファンタジーと呼べる¹⁴⁾かもしれない。こうした設定によってはじめて、諸葛の側が積極的に性的「欲望」を抱かずとも、異性との關係を進展させることが可能になっているのだろう。ホテルの一室で對面を果たした後も、性的な身體として振る舞うのは裴紫の側である。胸元が大きくあいたドレスに身を包んだ裴紫は諸葛に凝視され、恥ずかしげにその胸元を隠そうとする。容貌と相俟ったそうした仕草に“美”(p23)を見いだした諸葛に言われるがまま、裴紫は目を閉じて従順に抱かれる。

一人きりで誰かと向きあった時、君が目を閉じられるというのは、何を意味しているだろうか？それは相手を信頼しているという意味だろう。目を瞑ったままで相手の男から凝視されることを受け入れられる、ということだ。長く、ゆっくりとした温かな凝視に觸れ、君が内在的な瞳を見開くと、相手の内面が見える。そして同じように見開いた相手の内在的瞳から溢れでてくるものによって、君の心が潤むのが見えるだろう。僕は目を閉じた女性にいつだって、感動してしまうのだ。(p23)

引用は諸葛が実際に口に出した言葉ではなく、彼の内面を描寫した記述である。先の引用で藝術品を見いだして創造する藝術家の眼差しを“内在的な瞳”と呼んでいたが、ここでも“内在的瞳”が見つめる先にあるのは單なる裸體や性行為ではなく、美しい藝術品としての身體だろう。だがこうした想像も、性行為が終わるまでのつかの間のものに過ぎない。現實生活の時空に戻った途端、“痛みも楽しみ”(p25)も抱えた女の重い現實に、諸葛は“息もできないほどの壓迫”(p25)を覚え、女性と距離をとろうとするのが常のことだ、と記述が續く。

小説では行為の描寫は繰り返される一方、行為後の氣まずさについての描寫はこの裴紫との例を除いて一切ない。行為の後、それぞれの事情を抱えた女性たちが閉じていた瞳を見開き、批評的な眼差しを諸葛に向ける場面が實際には出てきても不思議ではない以上、諸葛あるいは『沙床』の書き手が意識から遠ざけようとしたものが何であるかが伺える。つまり性行為を「欲望」によるものではなく、“藝術”行為だとする諸葛の想像は、相手の女性からの視線を徹底的に排除することで成立していた、と考えられるだろう。その意味では、行為が終わってから裴紫が涙ながらに、自分にとってのこの行為の意味を語る場面は、『沙床』ではきわめて例外的な事態と言える。

裴紫は2週間前に夫が交通事故死して以來、どうしても事故の情景を思い出して眠れず、今日が結婚記念日でホテルも二人の思い出の場所だ、と語りはじめる。裴紫は見知らぬ男性と次々に関係を結んで性的快樂を貪るタイプではなく、諸葛と性的関係を結んだのも、夫の死を腦裏に蘇らせないための一つの方法だった、と言外に語っている。諸葛は当たり障りのない慰めの言葉を口にし

つつも、裴紫を取り巻く重苦しい現實に向きあうつもりはない。まだベッドに横になっている裴紫を一人残し、諸葛は“よくないと思い”(p28)ながらも、明け方に“そっと起きあがり”(p28)、ホテルを後にする。“よくない”という自覺からは、諸葛自身も性行爲をめぐる自分の想像が、現實には社會的に共有されるものではない、と意識しているのが分かる。男がそそくさと逃げたことを知った裴紫が、その不誠實な行爲をなじる可能性を意識しつつ、諸葛は別の想像でそれをすぐに封印する。

僕は裴紫の生命で偶然に出會った通りすがりの存在にすぎない。このような夜の場合、裴紫の必要に應じて、僕は自分とは異なる役柄を演じたのだ。本當の僕は登場しておらず、僕らの付き合いもすぐに終わるだろう。裴紫だって元気になるだろうし、新しい生活をはじめだろう。そうしたら、その新しい生活に僕のような役柄は必要ない。僕は單にその新しい生活の序幕を開けたにすぎない。(p28)

裴紫が一時的には諸葛のことを憤り恨むにせよ、やがて“新しい生活”をはじめるとには自分のことを忘れてしまうだろうという假定のもとで、諸葛が想像をめぐるし自分に言い聞かせているのが見てとれるだろう。精神的に落ち込んでいる裴紫を慰めるため、彼女を抱くことによって一時的に精神的避難所のような役柄を自分は演じたにすぎない。諸葛は一連の不誠實な行爲を、この新たな想像の中で見知らぬ他人への善意であるかのように、読み替えてしまうのである。“本當の僕”が関わっていたわけではないという主張からは、性行爲も含めて、主體的に裴紫と関わろうとした結果ではないという諸葛の意識が伺えるだろう。見知らぬ者同士の性的關係が單なる行きずりでは收まらなくなる事態を受けて、諸葛がどのように意味づけようとしているのか、次章で見ていこう。

3 「虚無」的運命論の利用

諸葛は“恥ずべきことに彼女のもとから逃げた”(p56)自身の行爲を強く意

識する一方で、他方では裴紫が“新しい生活”の中でそのまま諸葛との出来事を忘れ、失意の女性を慰める行きずりの他人による善行だった、という彼の想像が脅かされないことを願っている。諸葛は裴紫の電話番号やメールアドレスを知っており、自ら連絡を取ろうと思えば取れるにも関わらず、“ただ待つだけ”(p54) だったという態度からは、諸葛のこうした期待が見てとれるだろう。しかし数ヶ月後、裴紫がインターネットの掲示板にこの不愉快な体験を書き込み、“性欲主義者”(p57) となじっているのを見つけ、諸葛は“誤解”(p58) を正そうと裴紫へ長文のメールを送る。

諸葛は自分が行っている行為の全ては“好きでやっているのではなく”(p57)、生まれつきの“倦怠感からやっている”(p57) ことだから、と裴紫に理解を求める。

僕は自分が今演じている役柄も嫌いだし、すごく恨んですらいる。だけど、僕はそこから逃れられない。田舎に歸りたいって、自分によく言ってしまうんだ。僕は田舎者だから、田舎でしか安全だって感じられない。これは本當なんだ。ここ〔都會〕では、僕はとても弱々しい存在だ。(中略) あの晩、僕がそそくさと君のもとを逃げだしたのも、まさにこの弱さの叫びを聞いたからだ。僕には力がない。(p57)

“田舎でしか安全”を感じられず“逃げだして”しまうという記述から、諸葛が都會での対人関係、恐らくは裴紫など都會の女性との関係に恐怖を持っていることが伺える。諸葛が性行為の後に女性から批評的に凝視されるのを恐れ、現実生活で女性に向きあうのを避けてきた、という2章での分析結果をここに重ねるならば、諸葛の恐怖の背後には都會の女性に対する“田舎者”¹⁵⁾ としての“弱さ”、すなわちコンプレックスが働いていた、と推測される。この引用の後に諸葛は、恨みにせよ愛情にせよ、裴紫の感情は“有限”(p58) でいずれば心変わりし、“頼みにできない”(p59) と、自分に直接向けられた裴紫の恨みを超越的視點に立つことでかわそうとする。“新しい生活”をはじめたら、裴紫が自分との関係を忘れるだろうという前述の期待と同じもの、と言えるだろう。

更に諸葛は、そうした“有限”の物事に對して“あまり眞剣にはなれ”(p58)ず、“有限”の存在でしかない個人に對しては“責任を持ってない”(p58)と述べた上で、自分は“全世界に對しては責任を持って”(p58)、“人類の問題”(p58)を考えたいと續けている。個々人の存在や感情は“有限”で永遠に續くものではない以上、現在の感情などに基づいて關係を結んでも、その關係はどのみち永遠には續かない、と“倦怠感”に満ちた「虚無」的な運命論を展開する。諸葛のこうした哲學めいた思索は、自分も當事者である筈の女性との關係から逃れ、超越的視點に立つて身體行為や感情だけを抽出し、一方的に意味づける機能を果たしている。こうした意味付けを行う精神行為が、“人類の問題”を考えるということの意味だろう。この傾向は小説全體を通して認められる。ここに至って、かつて賛美されていた身體的快樂を享受する主體は、完全に背景へ退いてしまう¹⁶⁾。「虚無」的運命論を根據に使うことによって、身體的主體と精神的主體との分離が可能になっている點こそ、葛紅兵の身體創作を考える上で重要な點と思われる。

とりあえずここでは先ず、「虚無」的運命論を持ちだして、女性から逃げだす自分の“弱さ”を正當化する思索部分を取り除き、諸葛が實際には何に向かい、また何から逃げていたのか、メールの續きを分析していく。

愛情というのも同じく一種の交換關係なんだ。精液と唾液はこの交換の象徴だけど、より本質的なのは主に金錢と地位だ。とりわけ婚姻關係と結びついた愛情には、相手の身體に對する事細かな觀察、知力に對する細かい検討、地位や金錢に對する詳細な判斷がつきもので、こうした全てのものが交換の前奏になっている。(p60)

結婚を前提にした愛情とは、相手の身體・知力・經濟力・地位を細かに検討した結果、それらとの“交換”條件として差し出されるものにすぎない、と諸葛は非難する。諸葛がコンプレックスを覺える“田舎者”も、女性が吟味する條件の一つだろう。従って諸葛が向きあいながら、そこから逃げだしてきたものとは、結婚を意識する都會の女性たちが諸葛に對して行うシビアな評價だった、と考えられる。自分がたとえ女性に好意を抱いても、相手の女性は條件を

値踏みし、相手にしてくれないかもしれない。諸葛はコンプレックスのために、彼女たちを手に入れたいという「欲望」の手前で躊躇し、逃げだしてきたと推察される。女性から凝視されて逃げだす諸葛の“弱さ”は、結婚に縛られることなく、目を閉じて無条件に身体を開く女性への賛美と、ちょうどコインの裏表の関係にあるだろう。その意味では、裴紫が諸葛の過酷な条件に目を瞑り、死を以て相手への自己犠牲的愛情を全うするという『沙床』のラストは、まさにこの延長線上に置かれたものと言える。

自分の条件が劣っているのではというコンプレックスから、女性へ愛情を示すことを躊躇してしまう諸葛の“弱さ”(p57)は一貫している。諸葛はかつて南京大学の学生だった頃、当時交際していたアメリカ人女性に対して、“地位も金もない”“貧しい中国人”(p80)であることを理由に、永遠の愛を誓うことに“尻込み”(p80)した、と回想している。また裴紫への愛情を意識するようになってからも、遺傳疾患を抱える“自分の體”(p111)の問題以外に、“僕に對する裴紫の態度が愛情なのかどうか”(p111)、と諸葛は“さまざまな懸念”(p111)に思い悩んでいる。こうした煮え切らない諸葛の態度を、『沙床』の書き手は優しく庇護している、と言えるだろう。前述したように『沙床』では常に女性の側が性行為に誘うという設定になっているほか、愛情を覚えるようになった裴紫との関係についても、彼女の方から愛情を告白させている。こうした『沙床』の書き手の庇護のもと、諸葛は女性との関係でこれ以上傷つくことがない安全な立場を確保しながら、女性から身体や愛情を受け取ることが可能になっている、と言えるだろう。

もっとも諸葛は、結婚を意識する男女が相手の条件を値踏みすることを観念的には否定しているが、彼自身もそれから完全に自由なわけではない。日頃はそうした条件で人を判断しないと断りつつ、張曉聞の戀人がチェロキーに乗っているのを見て、“頼りがい”(p204)がありそうで安心だ、と諸葛は素直な感想を抱いている。またそもそも、女性から交際相手として自分の条件を評價されることに對してコンプレックスを持ち、裴紫との関係を進展させる勇氣が持てないこと自體、男女が互いに値踏みしあう“交換關係”から、諸葛が実際には自由ではないことを示しているだろう。それでは諸葛は具體的にどの条件が劣っている、と考えていたのだろうか。

『沙床』では諸葛が結婚を意識する女性は裴紫しか登場せず、また裴紫が諸葛の条件を意識する場面も描かれていない。小説ではもっぱら、諸葛が肝線維症の家系に生まれ、若くして死ぬかもしれない、という健康上のマイナス条件だけが問題にされている。しかし丹念に読むと、前述した“田舎者”という出身へのコンプレックス以外に、二人の間では経済力に距たりがあるらしいことが伺える。例えば初対面の折、裴紫の身なりが一目で高價と分かるものであり、かつ裴紫夫妻が自家用車を所有していたらしいことが記される一方、當時の諸葛は同僚から借りた、助手席のドアも開かないような中古の舊型サンタナに乗って南京に赴いたことになっている。諸葛に全く経済力がないわけではないが、裴紫から見ると劣っているのは明らかである。また裴紫は夫の死後、長期間にわたって各地を旅行し、後には上海で友人と一緒に會社を立ち上げ、更には自分の車を持っているという設定だが、これらは彼女の裕福な経済力¹⁷⁾を示すものだろう。小説では、諸葛のこれらのマイナス条件についてはごく瞬間的に觸れられるだけであり、偶然發生したノイズのようにすぐに消えてしまう。

その一方、『沙床』で強調される諸葛の健康というマイナス条件は、彼が唱える「虚無」的運命論を支える具體例にもなっているという點で、きわめて重要な機能を帯びている。つまりたとえ結婚しても、二人の關係は死によって早晩幕が閉じられ、長續きしないだろうという悲劇的見通しが、諸葛の「虚無」的運命論に説得性を與えているということだ。『沙床』ではこの健康に關する懸念ばかりが強調され、「虚無」的運命論とともに繰返し言及されている。そのため、遺傳という後天的努力では如何ともしがたい悲劇的運命¹⁸⁾によって、諸葛は生まれながらに「虚無」的運命論を抱き、それが女性との關係においても投影されているように讀めてしまう。全ての感情や關係は永遠に續くことはないという一般論を、「虚無」的運命論として體系化することによって、氣が付くと女性たちから逃げてしまう諸葛の“弱さ”が、致し方ないこととして擁護されるのである。「虚無」的運命論を強調する場合、諸葛が女性に對して抱くさまざまなコンプレックスは後景化し、先行研究でもほぼ見落とされている状況となっている。

最後に、諸葛が主張する「虚無」的運命論を共有した場合、性的「欲望」や

関係がどのように位置づけられることになるのか、確認しておこう。

〔肝線維症の発症に脅える〕二番目の兄が消極的に逃避しているとしたら、僕はどうかだろうか？一見すると積極的に見えるだろうが、芯のところで僕は僕だって同じだ。僕の場合、アルコールや音楽、それにさまざまな女友達の力で、内心の恐怖感を覆い隠している。狂喜の瞬間、まるで死との戦いに勝利したかのように見えるが、その狂喜は決まってくごく短い間しか続かない。(中略)僕はかたく目を閉じ、目眩く〔狂喜の〕中で忘れることによって、死はあたかも消えさったかに見える。——自分自身に死など見えなかったと言い聞かせることで、僕はある種の自己欺瞞の中に生きているのだ。(p145～146)

諸葛が女性との性行為に求めるものは、運命が定める死という恐怖から目を背けるために必要な刺激的な快感である。しかしその快感も次の瞬間には消え去り、再び死ぬことが決まっている現実にもどると、彼女たちと関係を維持しようとする努力も全く意味をなさない、「虚無」的運命が待ち構えている。諸葛は運命には逆らえないと観念し、女性たちの身体から身を引きはがし、再び一人孤獨にその「虚無」的運命を引き受ける。諸葛の女性遍歴はその繰り返しと読めるだろう。「虚無」的運命に支配された人生は、何かを實現していくという未来に向けての時間軸を失うとともに、運命が定める恐怖から逃れるために“足掻く”(p217) ことしかできず、生きることを切望する“夢の欠片”(p217) しか残されないことになる。「虚無」的運命論に従って諸葛の性的「欲望」を見た場合、絶望的な運命に逆らおうとする生への「欲望」であり、自分に與えられた唯一の“自由”(p217) と位置づけられることになるだろう。

『沙床』の性描写については、世俗に媚びすぎていないと評価する先行研究¹⁹⁾ も多いが、主として「虚無」的運命論に沿って描かれたこのような表現に評価が集まっている。そうした表現の典型例として、教え子で妹のように扱ってきた張曉閏とついに性的関係を結ぶ場面が挙げられるだろう。“ペニスを抜き出すたびに死に、挿入するたびに復活する”(p218) と描写される性行為は、明らかに“生死”(p218) の両極を往還する絶望的な自分の姿に重ねあわせ

られている。こうして諸葛の未來を指向しない刹那的な性的「欲望」への耽溺は、「虚無」的運命論によって死すべき“有限”の存在が生きたいと願う、悲壯な「欲望」として正當化されるのである。

4 おわりに

交際相手の条件を値踏みする女性の打算的な態度を諸葛は批判し、刹那的な性的「欲望」や愛情だけで無条件に結びつく関係を賛美する。その一方、諸葛は「虚無」的運命論を理由に自らの性的「欲望」を否定し、女性と積極的に関わることを拒絶する、という矛盾した態度をとっている。『沙床』において諸葛は、自らの行為についての責任を一個人の意志が及ばない「虚無」的運命に負わせることで、彼が抱えている性的「欲望」について、その主體性が不問にされているのが見てとれるだろう。そもそも『沙床』という小説を動かし、諸葛の人生に意味を與えているのは彼を取り巻く女性たちであり、諸葛は「虚無」的運命論を理由に自らは何一つ行動を起こさず、女性たちが犠牲を拂い獻身的に與えてくれたものを受け取っているだけである。『沙床』という小説は基本的に、男性が紡ぐ身勝手なファンタジーと結論せざるをえない。

しかし、『沙床』にリアルな要素が全くないわけではない。諸葛は自分の性的「欲望」を高尚なものとして正當化するのと引き替えに、「虚無」的運命論に自らの存在を明け渡し、多くの部分を支配されている。「虚無」的運命に支配され、自らの生きる意味すら決定できない諸葛にとって、女性の身体のみが自らの刹那的な意志、すなわち「欲望」を行使できるモノになっている²⁰⁾。人は未來に向けて實現すべき方向性を自身で支配することも、また把握することも叶わぬまま、幸福を求めて「盲目的」(p129)に人生の決定を行い、ひたすら生き続けることしかできない。『沙床』で繰り返し語られるこの「虚無」的な運命論²¹⁾は、世紀轉換期の中國で廣く共有されているものでもあるだろう。自分が望む生き方を自由に追求することが可能になった世紀轉換期²²⁾に、個人の「欲望」や身体が新たな社會状況にあわせて、どのように再編成されていったのか、という問題についてはまだ不明な点も多い。身體創作のトータルな社會的意義についても、今後さらに検討を積み重ねていく必要があるだろう。

注

- 1) 朱大可・張閔主編、高屋亞希・千田大介監譯『Chinese Culture Review (中國文化總覽)』vol.1 (好文出版、2005年10月) キーワード「一夜戀」(p314)などを参照のこと。
- 2) 注1前掲書キーワード「美女作家」(p271)、「身體寫作」(p280)などを参照のこと。
- 3) 『沙床』は長江文藝出版社から単行本で2003年11月に刊行された後、同年『作家雜誌』第12期(筆者未見)にも掲載された。王應平「疾病、愛欲與文學生產——以《沙床》為例」(『名作欣賞(下半月)』2006年第4期)によれば、『作家雜誌』版では第1・3・10章の一部、および大學行政を批判的に描いた部分ときわどい性愛描寫部分が削除されているという。本稿では長江文藝出版社の単行本をテキストとして使用した。
- 4) 1968年生まれ。江蘇省南通の出身。1989年に海門師範專科學校を卒業後、揚州大學に進學。母校の海門師範專科學校で2年間教鞭を執った後、揚州大學修士課程、南京大學博士課程を修了。湖北大學勤務を経て、現在は上海大學教授。
- 5) 朱大可・張閔主編、高屋亞希・千田大介監譯『Chinese Culture Review (中國文化總覽)』vol.2 (好文出版、2005年10月) 2003年11月文學事件 (p33)、キーワード「美男作家」(p262)などを参照のこと。
- 6) 主人公の男性の経歴が南京大學出身で、現在は上海の大學に勤務している等、葛紅兵の経歴を想起させる設定であるほか、小説中に著作として挙げられる『横眼堅看』も、葛紅兵のエッセイ集と同名である。
- 7) 『沙床』より以前に出版された『我的N種生活』は、葛紅兵の自傳的エピソードに著者の見解を加えて羅列する體裁をとっている。そこで語られるエピソードや見解には『沙床』と共通する部分が数多く認められ、自傳的な側面から『沙床』を読み解く必要があると思われる。その一方、『沙床』が複数の女性から次々と求愛されるのに對し、『我的N種生活』ではもてなかった學生生活が語られている等、両者の異なる部分に注目して『沙床』を読み解く必要もあるだろう。
- 8) 『滴泪痣』(中國青年出版社、2002年4月)を参照のこと。また拙稿「李修文『泣きばくろ』に見る村上春樹受容の一端——SMをめぐる綺想」(『中國文學研究』第31期、2005年12月)では、同書における性的「欲望」と「虚無」の關係について論じている。
- 9) 王宏圖は「都市日常生活、身體神化中的欲望書寫」(『當代作家論壇』2005年第5期)で、『沙床』が村上春樹『ノルウェイの森』を種本にしていると指摘している。
- 10) 十重田裕一「感觸の北京日本近現代文學翻譯の現在」(『國文學解釋と教材の研究』2004年9號所收、學燈社)は、村上春樹『ノルウェイの森』とともに渡邊淳一『失樂園』が流行している中國の状況を分析して、「性」と「告白」という共通性がある、と指摘している。
- 11) 某處に残って働きたかったが、モラリストに中傷されて追い出された (p121)とある。某處は學生生活を送った南京大學を指すものと推察される。
- 12) 注1前掲書キーワード「網戀」(p285・313)を参照のこと。インターネットを介して知り合ったのは裴紫だけだが、小説に登場する大半の女性について、相手の素性をほとんど知らないまま、性的關係が結ばれている。

- 13) 栗丹「虚假の沈醉——評葛紅兵《沙床》的時尚性和虚偽性」(『渤海大學學報(哲學社會科學版)』第27卷第4期、2005年7月)では、諸葛と張曉閔の關係について、裸の男女がベッドを共にしたにも関わらず、性行為が発生しなかったという設定など、現實ではあり得ない虚偽が多いと指摘している。
- 14) 注7前掲のエッセイでは、肌の色や言葉の訛りなど、農村生まれである葛紅兵が都市出身者に對してコンプレックスを持っていたことが語られている。傳記的要素を加味するならば、『沙床』で相手の素性を問わず、自ら身體を開く女性が繰り返し描かれていることは、葛紅兵のコンプレックスの裏返しと読むことも可能だろう。
- 15) 諸葛は作者の葛紅兵と同じ、江蘇省南通の出身という設定になっている。なお、孫德喜は「有誰來撫摸你脆弱的靈魂?——從《沙床》看現代都市人的精神狀態」(『寧夏師範學院學報(社會科學)』第28卷第4期、2007年7月)で、諸葛が田舎での子供時代を懐かしく回想すること、あるいは浴槽に一人體を沈めて安らぎを覚えること等に、彼の胎内回歸願望を見いだしている。孫德喜は諸葛の胎内回歸願望の背景として、現代の都市生活では個人が自らの責任と義務で世界に向きあうようになったものの、こうした状況にまだ不慣れで大きなストレスを抱えているためだろう、と興味深い指摘をしている。本稿1章で言及した李修文『滴泪痣』も、主人公の男性が胎内回歸願望を持ってモラトリアムを續けているほか、「虚無」的運命論によって自身が行う人生の選擇に責任を負えない、という設定になっている。兩者のこのような共通性は、男性作家による「欲望」や身體表現を考える上で、注目に値するだろう。
- 16) 注9前掲論文で王宏圖は、『沙床』では「欲望」や身體に絶對的な價值が置かれているにも関わらず、「虚無」的運命論を前にした身體は有限のとるに足りない斷片へ變わってしまう、と指摘している。さらに王宏圖は、小説の結末で裴紫が自死する場面を『ロミオとジュリエット』の滑稽な焼き直しとしながらも、人生に意味を與える最も重要な場面と評價し、「虚無」的運命論を超越するには身體を超越しなければならない、ということを示唆したものでだろうと考察している。
- 17) 裴紫が夫の死後も經濟的に全く困っていなかったという設定は、諸葛との結婚を望む彼女が何ら經濟的見返りを求めていないことを示すだろう。これによって、純粹に愛情のみで結びつく“ロマンチックラブ”(p71)として描くことが可能になっている。
- 18) 注7前掲のエッセイでは、例えば戸籍など後天的努力によっては如何ともしがたい條件で、よりよい教育を受ける機會が制限されること等について、厳しい批判を展開している。葛紅兵がどのようなケースに運命論を必要としているのか、あるいは逆に運命論を非難しているのか、詳細に検討する必要があるだろう。
- 19) 注3前掲の王應平のほか、樊義紅「一次有意義的哲理型寫作——再讀《沙床》」(『閱讀與寫作』2006年第7期)や呂玉銘・錢秀琴「欲望者的悲情言說——對《沙床》的另一種叙事解讀」(『哈爾濱學院學報』第29卷第1期)等でも同様の指摘がある。
- 20) 例えば、2002年に發表されて社會的に大きな反響を呼んだ慕容雪村的『成都，今夜請將我遺忘』では、人と人の關係が支配する者と支配される者というヒエラ

ルキーに構造化される中、ヒエラルキー上位が下位に對して振う「欲望」が下位をモノとして扱うことにより、その存在意義を奪い「虚無」化してしまう構圖が浮き彫りにされている。詳しくは、拙稿「慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論——「欲望」と「虚無」のリアリズム」(『中國文學研究』第33期、2007年12月)を参照のこと。

- 21) 先行研究でも、否應なしに存在の價值が失われてしまう現状において、價值を追求すべきインテリですら價值を見失い、世俗社會に振りまわされているという指摘が見られる。例えば「轉型期的青年知識分子心理——讀葛紅兵《我的N種生活》《沙床》」(『小説評論』2004年第5期)において、顧凡はこうした認識に立った上で、安定した人間關係の中でやりとりされる感情から切り離され、自由だが孤獨で精神的に脆弱な諸葛が、その孤獨な不安から逃れるために刹那的な性行為に向かっている、という解釋を示している。
- 22) 千田大介・山下一夫『北京なるほど文化讀本』(大修館書店、2008年8月)の「文學」(執筆：高屋亞希)では、こうした社會狀況を受けて、個人の人生を模索する青春文學市場が、1980年代生まれ世代を中心に形成されたことを指摘している。